印度學佛教學研究第四十八巻第二号　平成十二年三月



# 真宗における阿弥陀仏理解と「批判仏教」の視点

寺本知正

「批判仏教」という用語は、袴谷憲昭氏がその著作『批判仏教』において、「仏教とは批判である」あるいは「批判だけが仏教だけである」ということを意味したいと規定する用語である。その際、「実際には批判ではない仏教もありうる」ことから仮にそれを「場所仏教」と呼び、それに二者対峙的に命名されたものが「批判仏教」であるとされる。しかしながら、今日ではこの用語は一書物の題名にとどまらず、「従来の研究に対して批判的な立場に立つ仏教研究を総称する」（末木文美士『鎌倉仏教形成論』）ものと解する動向があり、いくつかの研究にそのことをおってみれば、袴谷憲昭『本覚思想批判』、松本史朗『縁起と空―如来蔵思想批判―』および『禅思想の批判的研究』、伊藤隆寿『中国仏教の批判的研究』、ジョアキン・モンテイロ『天皇制仏教批判』、等があげられる。

批判仏教の主張に関しては、袴谷氏の多岐にわたる関心のなか、本覚思想批判が基礎をなすもので、本覚思想とは自身によれば、（一）無条件に前提とされるゆえに、人間の己れの「場所（topos）」としての土着思想と無意識のうちに合体してしまったもの、（二）土着思想を自己肯定的に前提としてしまうゆえに、伝統を誇る権威主義であること、（三）体得された「真如」は言葉によっては表現できないとするゆえに、「信仰（saddhā, śraddhā）」や「知性（paññā, prajñā）」を軽視して言葉を無視するものであること、と以上の三点から規定される。また、「本覚思想」の本質的な思想構造を、「一切法の根底に、一なる「体」や「真如」としての「本覚」を捉え、そのうちに一切合財を包含する」構造であると、そして「偽仏教」の思想構造を「「多」なる現象（事、用、末）が「一」なる本質（理、体、本）に吸収されまたそこから再びそれらが発生していくという」構造であると規定する。松本氏の「如来蔵思想批判」も基本的にはこの思想構造を批判したものであり、如来蔵思想は現象の背後に如来蔵という基体を想定する「基体説（dhātu-vāda）」であり、仏教（縁起説）はそれの否定としてのみありえた、とする。両氏においては、基体説のような原理的な同一や無

差別を言うことが、「現実的な差別を肯定し、絶対化する」ことの思想背景としてとらえられ、よって現実に対する批判力の回復こそが批判仏教の重要な出発点の一つだと考えられる。

以上のような批判仏教を浄土教に関して展開したのが、モンテイロ氏の『天皇制仏教批判』である。モンテイロ氏は、その視点によって、まず、日本社会に根差す「天皇制仏教」を批判的に解明し、その特徴の一つを開祖信仰であると批判する。次に、親鸞の思想を検討するが、氏は、親鸞に影響を与えた曇鸞と善導の浄土教思想を峻別し、曇鸞の思想を批判して、「阿弥陀仏の四十八願（教法）よりも、その背後にある一法句・法性・真実智慧無為法身（理）を重んじていたのである。そのために、曇鸞の浄土教は阿弥陀仏の四十八願とは理を悟らしめるための方便にすぎない」とする。対して、善導の思想は、「三界六道を選び捨て極楽を選び取」り、「仏語の背後に理のようなものを置か」ずに「阿弥陀仏の四十八願そのものを真実」とするゆえに、善導は「中国仏教の思想史における最も徹底した如来蔵思想批判者」であるとされる。また、氏は、従来の宗学および仏教研究のあり方に対して、「社会的立場、イデオロギー的立場を学問の一前提として見る観点が本質的に欠落」していると批判する。

ここで、これまで紹介してきた批判仏教の視点に対するいくつかの反応を紹介することと私自身の見解を示すことで、真宗の阿弥陀仏観をみていく本論文での立場を示したい。まず、批判仏教が主体的に提示する「真の仏教」という観点に関してであるが、末木氏（「アジアの中の日本仏教」）は、仏教が「本質主義の誤謬」に対して常に批判的であったというポール・ウィリアムズ氏の説を紹介して、「正しい仏教」と「偽仏教」を割り切ることに疑問を呈し、「仏教そのものに内在する問題」として考え直すことを提案する。また、菱木政晴氏（『解放の宗教へ』）は、「本覚思想」に反対するのは「それが想定された「本来の仏教」に反するからではなく、それが差別的なものであるから」とする。いま、この問題と先のモンテイロ氏の学問批判の観点に関しての私見を述べれば、学問の一前提に社会的立場を見るという氏の見解には同意したい。また、仏教に関わる人間の様々な営みの歴史的総体を実際の仏教としてとらえていくことは批判仏教に見解を同じくするが、私見では学問の作業をあくまで人間による作業であり、仮に「正しい」ものがあるとしても（宗教に関わる主体として、正しいか正しくないかの問題は常に最も深い部分に位置する関心であるが）、それには近づくことは出来ても決して到達することは出来ないという前提に立って理解したい。であるからこそ、菱木氏の指摘にあるように、ある説が差別的であるかという視点をはじめとする、社会的立場を含めた過去の学問の検証が今日に重要であると思われ、特に今日的環境に

連関する時期的前近代から近代への変遷の検証が重要であると思われるのである。

批判仏教が提示した、「多」なる現象が「一」なる本質に吸収されまたそこから再びそれらが発生していく構造という視点より、真宗の過去の阿弥陀仏観を外教観とともに検証し、いくつかの評価を交えていきたい。

まず、松島善譲（一八〇六―一八八六）の如来観であるが（『顕浄土教行証文類敬信記』）、法性法身・方便法身の二種の法身を「独リ弥陀ノ別徳ニ属」して、阿弥陀仏が諸仏通総の本主であることを示すための義であると理解する。そして諸仏の聖道門による修入を「皆真如ヨリザンザン引入セラルル」ものであり、「証入シ終エテ見レハ。則今迄用キタル真如ハ即弥陀ノ真如海ナリ」と、聖道門での証入にしても、その根底には真如があり、証入してみればそれはまったく阿弥陀如来の働きにあったことがみられると、諸仏の教える道も結局のところは阿弥陀如来に帰入する道であるとする。阿弥陀如来ひとりを即ち真如であるとする理解の背景には、おそらく江戸期宗派宗学の枠組みの影響があるであろうし、またこの問題は今日では宗教的寛容の問題にも関連してくるものであるが、ここで、批判仏教の視点からより重要な点は、善譲が諸仏の教えの背後あるいは根底に真如を想定し、諸仏の教えはすべてそれを本源とするという構造が見られることであろう。そして、この同じ構造は善譲の外教観にも見られる。善譲の理解では外教全体に関して、一つには仏教以外のすべての法とするが、もう一つ、正見と邪見という義を立てて、外教にも仏教を翼賛するものがあり、「一概ニ偽トハ云フベカラズ」との見解を示し、外道の邪説が魔の説であるのは自らを無上道だという点にあるとする。よって、仏教を妨げる限りは帰依してはならないと断りながらも、菩提は実相真如であり、すべてはこの中のものであるのだから、孔老ともに菩提の大道であり、その異名であることを世間では表からそれを知らないだけであるとの見解を示す。善譲における如来観と外教観のこうした構造は、まさしく批判仏教が提示する構造にあてはまるであろう。ただし、善譲のこうした外教観の背後には対外的な仏教擁護の動機も考えられるであろう。また、善譲はひとりの衆生にひとりの菩薩が成仏するという非常に実存的な、近代を先駆けた主観的理解も示している。このことも、批判仏教の視点から云えば、体験重視主義ということになろうし、今日の大谷派の近代教学批判からも指摘されるように、現実の相対化の視点に欠くことは確かであるが、しかし、宗教にはそうした決定的な体験という側面も必然であることを考慮したい。

次に、石泉僧叡（一七六二―一八二六）の如来観であるが（『教行信証文類随聞記』）、まず、石泉は真如をすべての縁起す

るものととらえ、ならば阿弥陀如来も諸仏も真如の本有の法である光明と寿命が顕ずるというところにおいては連れだち同じであると理解する。石泉のこうした如来観を見る限り、善譲と同様に批判仏教の指摘する同じ構造を有しているが、石泉の如来観の特徴は、何が諸仏と異なるかという点にある。石泉の言う異なりとは、その本有の法が四十八願で顕わされたことであり、また、諸仏が法性法身より直接に三身を開くのに対して、一段方便法身と出て三身を建てることである。石泉は、「滅土カ第一義ニシテ。光寿ハ第二義ナリ。第一義ヲ本仏ニ用ヒスシテ。衆生証果ノ処ニ用ヒテアルハ。イヨイヨ衆生ノ証至極シテ。本仏ト同ク無余究境ナルヲ知ラスル願文ノ仕立ナリ」と、衆生の救済の自覚により重点をおいた如来理解をする。そして、注目するべきは、「弥陀ノ上ニ滅土アルハ云ハズシテ知レタコト」、「弥陀ハ法性法身ノ沙汰ヲセヌ」と、たとえ現象の背後に一なる本質があるとする構造になっていようとも、その本質を問題にはしないと理解する点である。では、このような如来観を示す石泉の外教観はどうであろうか。石泉は、真正・邪偽、内・外という言葉を使って、仏教以外は外教と明確に定義する。そして、外教に通じてみられることは、老荘の虚無、自然にしても、自ら変わることのない実在を立てる点であると指摘する。そして、この外教が少しでも心に入り込めば正見には入れないことを言い、外教に対する不拝を信心との関係において理解する。さらには、神道信仰の本質を、天神地祇とは区別して国との関係にみるが、ただ、孔子に関しては浅く近く説くものであって、「屹度正法」と言う。こうした石泉の外教観を見るとき、まさしく批判仏教が示した、信仰に基づき、知性による具体的な考察を土着思想に投げかける批判力がみられる。

ここまで、批判仏教の主張を紹介し、その視点に基づいて阿弥陀如来理解を検証してきた。現象の背後に一なる本質を立てる構造を批判するという点にはまさしく賛同し、善譲の如来観と外教観にその構造が見とれた。しかし、一方で石泉の理解を見るとき、理解あるいは関知するという人間の作業をどのように捉えるかということも、批判力に関して重要な点であると思われるのである。

〈キーワード〉 批判仏教、如来観、外教観

（龍谷大学研究生）